

# アトリエ 琉游舎 だより 180号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)

2024年6月5日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mvsite-3>

## 夏もなほ心はつきぬあぢさゐの よひらの露に月もすみけり

俊成



- 暦の上ではすでに夏です。梅雨明けの本格的な暑さの前にもすでにクーラーが必要な暑さがやってきてしまいました。梅雨寒の日のこたつが欲しくなる気候は、春になって一気に活動を始めた植物たちに休息を与え、適度な雨と気温が順調な成長を促すほどよい気候なのかも知れません。成長期に雨が少なく気温も高いと夏野菜もあまり出来がよいようです。
- 梅雨の時期に似合う花と言えばアジサイではないでしょうか。和歌の世界では暑い夏は春や秋に比べて「もののあはれ」に心が尽きる機会が少ないようです。自然の流れに心を寄せ、飽くることなく季節を堪能出来るのは春や秋なのでしょう。しかし俊成は夏の自然の中に心尽きて（もののあはれに心魂尽き）しまったようです。俊成の和歌はアジサイの四つの花びらの雨露に宿る澄んだ月の光に、心が尽きるまで眺めている彼の姿が目に見えるようです。
- 平安時代と現代のアジサイは花の有様が大きく異なるでしょう。俊成のアジサイは今で言うやまあじさいだと考えます。可憐で繊細な四ひらの花に映る月はその月もまた繊細で可憐な光を放つでしょう。現代の外来種や改良種の大ぶりで自己主張の強いアジサイには俊成の歌は似合いません。満開時は派手で存在感がありますが、梅雨時の雨に打たれて萎れていく姿も自己主張が強いままに滅びていくようで、私はもののあわれを感じることが出来ません。
- 動植物も昆虫もこれだけ外国との往来が激しくなると、外来種の攻勢で古来の在来種はどんどん駆逐されてしまっているようです。コリーナの蓮池で鳴くウシガエルも特定外来生物です。文化も言葉も経済もいつのまにか外来種に取って代わられていることに気づいていないだけなのかもしれません。これをグローバル化というならば、いっそ国を閉じて日本人古来の無常感に心尽きる思いを委ねるのも悪くはないかと、よひらの露に澄む月を思い浮かべながら妄想してしまいます。

### 6月・7月スケジュール

月		火	水	木	金	土	日
10	11	12	13	14	15	16	17
	読書会 13時半から		映画会 13時半から				写経会 13時半から
17	18	19	20	21	22	23	24
			映画会 お休み				
24	25	26	27	28	29	30	31
	読書会 13時半から		映画会 13時半から				
7月1日	2	3	4	5	6	7	8
			映画会 お休み				

読書会

6/11・25  
(火) 13時半

写経会

6/9 (日)  
13時半

映画会

6/13・27  
(木) 13時半

狂言綺語を書き始めようとしていた矢先に朝のNHKニュースで速報が流れました。刑事訴追されていたトランプ元大統領の裁判で陪審員が有罪の評決を下したとのこと。控訴の権利もあるのでまだ有罪が確定したわけではありませんが、陪審員全員一致の判断でなければ評決は下せないはずですから、この判断は非常に重いものだと思います。しかしアメリカの世論もマスコミの論調も秋の大統領選挙には大きな影響はないと考えているようです。当のトランプも「不正で恥ずべき裁判だ。本当の評決は大統領選挙の投票日に国民によって下される」と述べているのです。小国の独裁者ならいざ知らず、大統領はアメリカ国民だけでなく全世界に影響力を行使できる権力を持つ存在です。一見民主主義の基本である国民の自由な意志に委ねる(選挙)という立場を取っていますが「罪状はでっち上げで全てが不正だ」と述べていることは法律を認めない証拠です。自分の権力行使の自由(正義)は守るが他者の正義は認めないという独善的自由の考えです。

アメリカは正義を旗印に人権を守り自由を尊重する民主主義を体現した国家であると言われ、また国民もそう信じているのでしょうか。そしてその行政執行者がアメリカ大統領です。法律を作る立法府の議会と法律を司る司法の三権分立が厳格であるからこそアメリカは民主主義国家として世界のリーダとなっていたはずですが、その立法府に大統領選挙に不正があったとのトランプの扇動を受け乱入する事件がありました。そして今回の司法判断を不正とする主張です。法を無視し議会を暴力によって制圧しようとする行動は民主主義の対極にあることは自ら民主主義を勝ち取ったわけではない日本人にも、自明の理と思われまふ。このトランプの主張を聞いてアメリカ国民が彼にNOを突きつけなかったとしたら、正義も自由も人権もそれを行行使する権力を持った者が決めるものだと世界に知らしめることになるでしょう。これでは独自の正義を主張するロシアもイスラエルも戦争を自らやめる訳がありません。彼らにとっては戦争を続けることが正義であり善だからです。戦争正当化の主張に対してトランプはお墨付きを与えていることにアメリカ国民は気づかなければなりません。アメリカを先頭にして西欧民主主義国家が主導する民主主義は、普遍的規範のないご都合主義です。彼らの民主主義はルールの適用を自分たちの都合で変えても選挙によって正当性が与えられればそれが正義となる民主主義です。日本は彼らのお先棒を担いでどこまでお猿の籠屋を演じるのでしょうか。

私は政治的な闘争には興味がありません。その闘争の根拠が双方異なる論理によって戦われている現実をお釈迦様の教えを信じて生きる私には全く理解できないのです。諸行無常、ありのままに世界を観て、その世界を「空・一如・不二」と観ることが仏様の智慧です。一方、絶対的価値によって体系づけられたと主張する「善」や「正義」が全く正反対の「悪」や「不義」と主張されてしまう奇妙な現実が、今顕著な対立とともに私たちの前にあります。その対立の根は、人それぞれにいくつもの絶対的価値が存在すると言う絶対矛盾に気づかないふりをしているからです。相手が根拠とする絶対的価値を攻撃することで、自ら信じる絶対的価値の正当性を主張することが対立の原因なのです。お釈迦様の世界に「絶対」はありません。常に縁起の法則によって流れを止めない「運動」する世界です。瞬間はあってもその瞬間はもう今は存在しない何も無い瞬間です。無いものに拘っても何も掴むことは出来ません。だから「空」です。善も悪も。生も死も。何も無いのです。だから「善悪一如」「生死不二」なのです。何も無いところに不変絶対を措定して、そこに価値の楼閣を組み立てて正義や善や自由や人権を主張してもそれは砂上の楼閣に過ぎません。双方の楼閣に盤踞している者同士が、殺し合い、なじり合い、恫喝をし合っている現実が私たちの生きる世界です。

そこで仏教は何が出来るといえば、恐らく何もできないでしょう。それは他の世界宗教(キリスト教とイスラム教)と同じ宗教カテゴリーの中で考えれば何も出来ないでしょうと言う意味です。宗教という言葉が表す意味は広範なので、ここではあえて仏教を宗教とはいいません。私が定義する仏教は「世界の見方(諸行無常)」「自己と他者の関係性(諸法無我)」「私はどこにいるのか(一切皆苦)」「私はどこに向かうのか(涅槃寂靜)」についてのガイドです。お釈迦様の教えは「世界の歩き方」の道しるべ、「君たちはどう生きるか」の一人一人への問いかけです。その問いに呼応することが「信」です。信とともに(お釈迦様と)日々を生きることが「行」です。私と信行をともにする仏教はこれが全てです。私に予め与えられている自由も人権もモラルもありません。日々を生きることでお釈迦様から自然に身に纏わせてもらっている自由や人権やモラルです。日々をありのままに生きることでお釈迦様(世界)が私に与えてくれる贈り物です。それは絶対矛盾の砂上の楼閣に、既知既存のものとして保存されていたものでは決してありません。

世界の価値を築き上げた根っこは宗教と考えても良いでしょう。キリスト教やイスラム教を信奉する人々がその根っこから民族の善や正義や主義主張、政治体制を育て上げたのです。双方が堅固に作り上げた価値体系の根底が異なれば、そこにそびえる価値の楼閣も異なるはずですが、世界は二つの大きな楼閣の他にも分派が作る幾つもの楼閣が存在しています。それぞれが「絶対」を主張し合えば世界から闘争はなくなりません。絶対同士の小競り合いがそこら中で起きる毎日か、ある絶対が数多の絶対を無力化して絶対の統一を図るか、世界はそのような方向で動いているように見えます。そこで何も出来ない仏教が唯一出来ることは「絶対はありません」と言い続けることです。絶対がなければ全ての存在も思考も相対的なものです。相対的な価値は互いに打ち消し合い必然的に無力化されるでしょう。価値が「空」になることができれば、富もヒエラルキーも権力もない無価値、平等、自由に満ちた「空」、つまりありのままの世界が現れると考えることはあまりに理想的で、仏教が結局国家の権力の根拠にならなかったことを示しているのかも知れません。